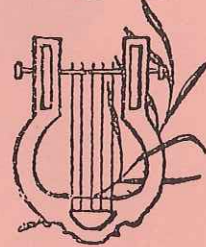


廓清かくせい



廓清会本部発行

復刻にあたって——戦前期、日本の帝国主義国家は、「家制度」を守るために、一方で女性にのみ貞操堅持を要求し、一方で男性の性欲処理の場として遊廓を管理することで、女性を二分極化しつつ、女性の性も男性の性も管理・支配していった。

女性は政治的権利はもちろんのことあらゆる人権が蹂躪されていたが、国による人権抑圧の最たるものが、日本にしかないといわれる公娼制度であった。

しかし、買売春の制度を良しとせず、廃絶をするための運動は早くからおきている。

一八七〇〜八〇年代には群馬県などが遊廓を断行したし、キリスト者を中心に

自由廃業運動が繰り返された。一九二一年吉原遊廓の火災に際しては、遊廓再建反対の運動が盛り上がった。そのときにまさに遊廓を目的として設立されたのが「廓清会」である。

廓清会は、主宰者・伊藤秀吉を中心にこれまで運動の中心にあったキリスト者たち

のみならず、ひろく心ある人々に訴えて遊廓の大同団結をはかった。本誌『廓清』は、廓清会の機関誌として一九一一年から一九四四年までの長きにわたって、

性奴隷解放のため展開された遊廓運動を記録している貴重な資料である。ここには各地で繰り広げられている運動の状況、買売春に関わる統計などの資料、多くの

知識人による遊廓論の展開、等々おおよそ戦前期遊廓運動の資料のすべてが網羅されている。

日本近代史研究、とくに女性史・キリスト教史研究に必須の文献として、近年新たに発見された第三五巻第三・四合併号も合わせ、一五年ぶりに復刻するものである。

戦前期、女にとって最大の人権抑圧である人身売買

買売春を廃絶するために遊廓運動を進めていった

遊廓団体——廓清会の機関誌『廓清』、一五年ぶりの復刻！

全三三巻・別冊一

B5判上製 総約六、五〇〇ページ

本体揃価格——四九万五〇〇円

THE
PURITY

廓清

不二出版



廓清本部役員 上段左から 顧問 森村市左衛門・大隈重信 / 中央 会長 島田三郎 / 下段左から 副会長 安部磯雄・矢島楯子 (一九一三年)



廓清大演説会講演の四女性 (同年一月三日、大阪にて) 上段左から 広岡浅子・矢島楯子・林歌子・本多貞子



下關市先帝祭の醜態 (照参事記) 狀

安徳天皇を祭る下関市赤間神社大祭で娼妓が盛装して練り歩くことを批判 (同年四月) 上段左から 参拝娼妓の太夫姿・官幣大社赤間神社 / 下段左から 先帝祭太夫参拝の光景・参拝娼妓の官女姿

市民レベルにおける娼妓運動の記録

竹村民郎 (大阪産業大学経済学部教授)

●日本の近代において男性には、売買春に関して女性の人權が抑圧されていたという認識がきわめて弱かった。また同時に封建的家族主義の影響もあって、家庭の女性たちも廓の女性を自分たちとは別世界の人間であると考えていた。したがって当時の民衆は、娼妓の自由廃業に対して積極的に支持したこともなく、断固として人權を主張したこともなかった。娼妓運動を推進したのはわずかに日本キリスト教婦人矯風会、救世軍および廓清会に過ぎなかった。



『廓清』復刻に寄せて

草の根の人権擁護の「証し」の書

一番ヶ瀬康子 (東洋大学教授)

●日本の娼妓運動は、特殊な様相をしめしている。なぜなら、娼妓を、たんに肉体をうる娼妓を絶滅するための社会活動として展開するのではなく、社会運動・政治運動として追求、展開しなければならなかったからである。それは、周知のとおり、娼妓の存在を国家がみとめ、しかもその集団営業を公許するという類のない「公娼制度」が存在したからである。したがって、その非人道的で破廉恥な制度を撤廃するためには、あついで人権感覚とともに、強い政治批判をして緻密な戦略を必要としたのである。

娼妓運動の地下水脈

高橋喜久江 (日本キリスト教婦人矯風会)

●『廓清』が再び復刻される。社会の需要があるわけでもなく、喜ばしいことである。矯風会の先輩久布白落美から、『廓清』は警察署に贈呈されていた。売春防止法の成立は廓清の地下水的な働きがある「ときかされてきたが、『廓清』を読みたく思っても戦災で焼けた娼妓会にはなく手に入らなかった。復刻とは有難いもの、文化の継承なりを実感したものだ。

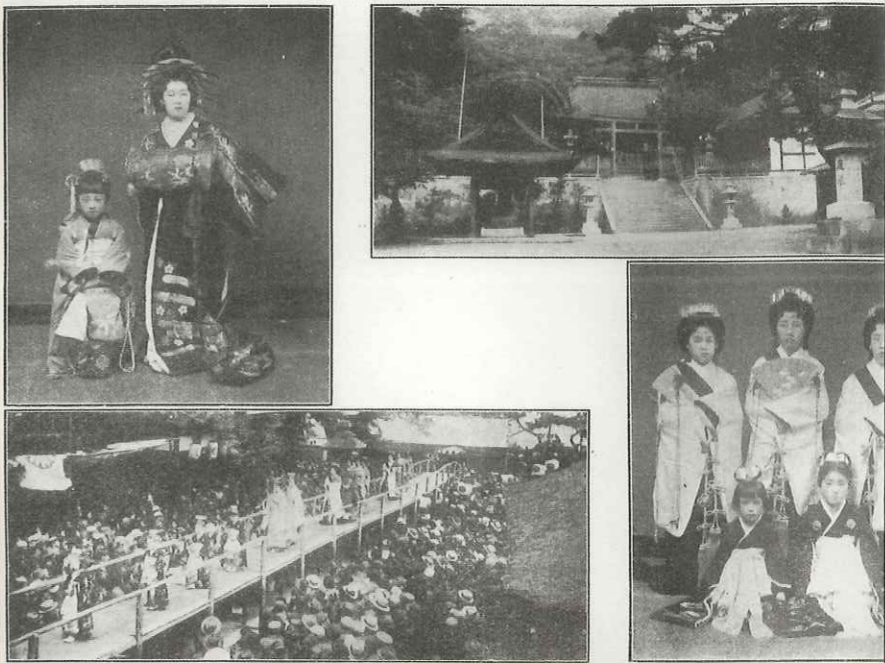
関連図書のご案内

日本キリスト教婦人矯風会 刊

婦人新報 (全六〇巻、別冊)

- 明治二十一年(昭和三年)刊
●別冊 解説(五味百合子)・総目次・索引
●菊判・上製・函入・総300,000頁
●本体揃価格 600,000円
●推薦 一番ヶ瀬康子・高橋喜久江・田中寿美子・松尾尊光
日本でも最も歴史の古い女性団体である矯風会の機関誌である本誌の復刻によって、女権運動の先駆者かつ大きな柱であった娼妓会の再評価がなされよう。前身の『東京婦人矯風雑誌』『婦人矯風雑誌』をあわせて復刻。
日本救世軍 編
『このころ』JCS(全二巻・補巻・別冊)

（照参事記）状暴態醜の祭帝先市關下



安徳天皇を祭る下関市赤間神宮大祭で娼妓が盛装して練り歩くことを批判（同年四月）
上段左から 参拝娼妓の大夫姿・官幣大社赤間神宮
下段左から 先帝祭大夫参拝の光景・参拝娼妓の官女姿

市民レベルにおける娼妓運動の記録

竹村民郎（大阪産業大学経済学部教授）

●日本の近代において男性には、売買春に関して女性の人權が抑圧されていたという認識がきわめて弱かった。また同時に封建的家族主義の影響もあって、家庭の女性たちも廓の女性を自分たちとは別世界の人間であると考えていた。したがって当時の民衆は、娼妓の自由廃業に対して積極的に支持しなこともなく、断固として人權を主張したこともなかった。娼妓運動を推進したのはわずかに日本キリスト教婦人矯風会、救世軍および廓清会に過ぎなかった。

●『廓清』はまさに廓清会の機関誌であり、そこにはキリスト者のみならずひろく市民レベルにおける娼妓運動の貴重な記録がみつづられている。『廓清』をみる時私たちは悲惨な娼妓の生活、検梅制の内実、官僚と業者の癒着、非人道的な張店、朝鮮人娼妓の目をおおような実態等々の真実の記録を知ることができる。『廓清』がしめす史実を直視することから、男女同権の真の意義があらかになるであろう。

買春社会日本を歴史的に見直すために

松井やより（フジテレビ女子アナリスト）

●『娼妓運動』は今の言葉でいえば、性奴隷解放運動といえるのではないか。遊廓に奴隷のように拘束されていた女性たちを救出するために、命をかけて闘った人々の記録を『廓清』で読むと、自分自身の生き方さえ問われている気がする。

●『廓清』という本、今、日本にはタイなど近隣のアジア諸国から何万人もの若い女性たちが貧しさゆえに暴力団関係の人身売買組織によって日本の性産業に送り込まれている。監禁され、身に覚えのない何百万円もの借金を負わされて、日々売春を強制されている、文字通りの性奴隷にされているのである。そこから逃れようとして業者を殺し、殺人犯として裁かれるタイ女性が跡を断たない。彼女たちの支援活動に関わっているが、『廓清』の人々のように身の危険を顧みない行動までではないからだ。

●ただ、女性の人權、女性への暴力、女性の自己決定権といった新しい考え方や、そして買春そのものの新しい見方も広がっている現在、『娼妓運動』をこらえなおす必要がある。時代の限界とはいえ、女性たちを醜業婦という蔑称で見下し、一夫一婦制を至上のものとし、買う男性の責任を不問にし、軍国主義に絡めとられて行ったのだ。

●とどまることを知らない現代の性の商品化に歯止めをかけ、牢固とした買春社会日本を変えるには、娼妓運動の歴史から汲み取れるものは多い。その意味から、『廓清』の復刻は実に貴重である。

娼妓運動の地下水脈

高橋喜久江（日本キリスト教婦人矯風会）

●『廓清』が再び復刻される。社会の需要があるわけでもなく、喜ばしいことである。矯風会の先輩久布白落実から『廓清』は警察署に贈呈されていた。売春防止法の成立は廓清の地下水的働きがある」ときかされてきたが、『廓清』を読みたく思っても戦災で焼けた矯風会にはなく手に入らなかった。復刻とは有難いもの、文化の継承なりを実感したものだ。

●亡き村上信彦氏が「娼妓運動は根源的な人権闘争であり、男女両性の完全な協力による運動だった。こうした男女両性の自由で対等な協力関係は、日本の社会運動の場合他に例をみることができない」と評価している。

●『廓清』は廓清会の機関誌であるが、廓清会は一九一一年吉原大火のあと発足した。男女の娼妓運動家の結集である。娼妓運動の目的を一つに絞れば、他人の売春を搾取する。売春業者の公認の廃止である。売春業者の存在を国家が容認公認している限り、なくすべき売買春はなくなる。公娼制度とは国家として採ってはならぬ政策である。

●日本は長い間、公娼制度を採り、売春防止法の獲得で一旦は絶縁したかにみえたが、別の法律でまたや性産業を公認している。日本軍「慰安婦」問題もその根底には公娼制度の影響があり、現代の性産業で働かされている来日女性問題もまた買春容認の結果である。『廓清』に登場する現象を過去のものとせず、あらわれ方は異なっても本質的には人権侵害、性的搾取の横行する現代の課題に目を向けてほしい。

関連図書のご案内

（復刻版）

日本キリスト教婦人矯風会刊 婦人新報（全六〇巻・別冊）

- 明治21年～昭和33年刊
- 別冊―解説（五味百合子）総目次・索引
- 菊判・上製・函入・総30、000頁
- 本体価格 600、000円
- 推薦―一番ヶ瀬康子・高橋喜久江・田中寿美子・松尾尊允
- 日本でも歴史の古い女性団体である矯風会の機関誌である本誌の復刻によって、女権運動の先駆者かつ大きな柱であった矯風会の再評価がなされよう。
- 前身の『東京婦人矯風雑誌』『婦人矯風雑誌』をあわせて復刻。

日本救世軍編

ときものゝこ（全二巻・補巻・別冊）

- 明治28年～昭和23年刊
- 補巻―『日本救世新聞』『朝のひかり』のとき
- 別冊―解説（室田保夫）総目次・執筆索引 全2巻
- A3・B4・A4判・上製・函入・総9、042頁
- 本体価格 400、000円
- 推薦―朝野 洋 一番ヶ瀬康子・杉井六郎・高橋喜久江・山室徳子
- あまりにも名高い娼妓自由廃業運動とその救済活動、生活困窮者、無宿者、刑余者対策、結核療養所創設、災害救済……等々、日本救世軍の業績は、日本近代の社会問題、人権問題及び社会福祉の歴史を語るのに不可欠である。

娼妓（全巻）

娼妓雑誌社発行 竹村民郎解説

- 明治23年～明治24年刊
- 竹村民郎解説
- 菊判・上製・函入・326頁
- 本体価格 9、000円

東京や群馬など各地で娼妓運動が盛り上がりつつあった八九〇年に創刊された本誌は、草創期娼妓運動の各地の状況を克明に伝える貴重資料。

上毛之青年（全二巻・別冊）

上毛青年社発行 片野真佐子解説

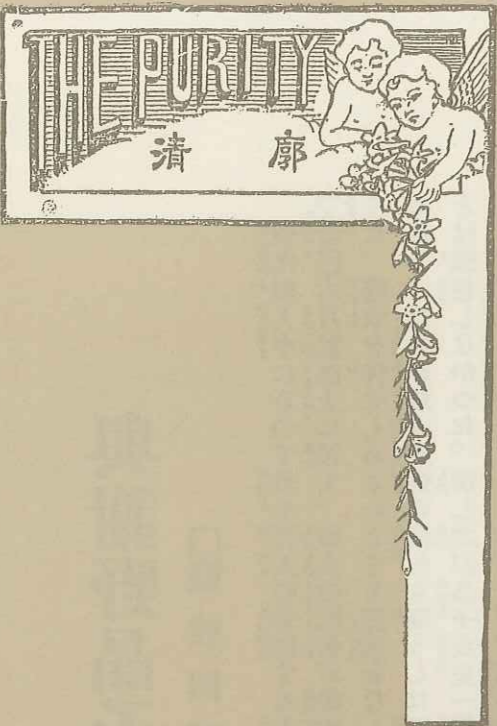
- 明治22年～明治29年刊
- 別冊―解説（片野真佐子）総目次・索引
- A5判・上製・総1、234頁
- 本体価格 36、000円

群馬県西上州の「上毛青年会」の機関誌。同会は日本の娼妓運動をリードし、県議会で娼妓令をからとる。娼妓運動の先駆の貴重な記録である。

伊藤秀吉著

紅燈下の彼女の生活 日本娼妓運動史

- 昭和6年刊
 - 高橋喜久江解説
 - 四六判・上製・函入「紅燈下の彼女の生活」694頁 本体価格 8、000円
 - 日本娼妓運動史 610頁 本体価格 7、000円
 - 推薦―高橋喜久江・吉見周子
- 廓清会の中心人物である伊藤秀吉が著した本書は、その視点に多少の時代的制約があることは免れないにせよ、男女の民主主義者・キリスト者の良心が貫かれている。買春の歴史、娼妓を指した人々の苦闘を知る上で恰好の書。



與謝野晶子女史に與ふ

□藝妓問題に就て□□

伊藤 江南

現代婦人中にあつて最も吾人の尊敬する與謝野晶子女史は「太陽」六月號誌上に於て、婦人矯風會が御大典奉祝の公會席上に、藝妓を侍せしめまいとする運動をなしたるを難せられた。私達は婦人同性の間から斯うした反對の聲を聞かうとは豫想しなかつた。併し之が晶子女史一個の私見たるに止まらば、私は別段いふことはないが、或は我々に對する代表的反對意見でありはしないかといふ點からして、一言反駁を試みやうと思ふ。

晶子女史の所論は、詮じ詰むれば凡そ次の數項に歸する。「藝妓も日本國民たる以上大典を祝する感情に我等と變りはない」それも藝妓として参加するのであつて、醜業婦としてではない「醜業婦と云つても全部が其行爲をなすのではない」表面は藝妓を業としてゐるものである「彼等と雖裏面の醜業を愧ぢてゐるのだから、出来るだけ訂かめを以て直したるべき」としたる。

私が之を論駁するには、先づ「藝妓は醜業婦なり」といふ事が前提とならなければならぬ。私達は今日の藝妓は私娼としての一表現であると見てゐる。これには晶子女史も世間一般も反對がないやうに思はれる、若し此前提に反對であるなら晶子女史の彼の言論は殆んど意味をなさない。何となれば百の辯論よりは唯一語の「藝妓は醜業婦に非ず、故に公會の席に侍して可なり」と云ふ事が大切であり、彼等の醜業婦に

非ざる事を辯證する事に努めらるべき筈である。然るに事茲に出でず、議論の骨子が「藝妓も亦國民也」といふ處にあるのであるから、女史は即ち吾人と共に先づ第一に「藝妓即醜業婦」といふ事を承認したものと認めない譯には行かぬ。然らば私は議論の順序として藝妓が醜業婦である事を論證するの必要がなくなつた。それでも強て證明せんとするならば徒らに論理的遊戯を試みるに過ぎない譯であるから、藝妓は醜業婦なりといふ前提の下に論旨を進める事にする。

先づ第一晶子女史は

藝妓も亦日本國民であるから、國家の慶典を祝する感情に我等と變りはない。

と云はれた。これは一應尤もな意見であり、且つ多數の人等を誤る議論であるやうに思はれる。私達は人並以上に眞に彼等が國家の喜びを喜びとし、國家の憂ひを憂ふるの人たらん事を欲してゐる。廓清會などは實に其れが爲めに出來てゐるのだと云つてもよい位なものである。併し乍ら彼等の平素の生活思想より云へば「國民だから國家の慶典を祝する」といふ語をさう單純に承認する事が出來やうか。私は不幸にして其言葉の中に大なる矛盾のある事を悲しむ者である。何と

第五卷第九一〇号(一九一五年一〇月より)



廓清

全三巻別冊

B5判上製 総約二六、五〇〇ページ(分売不可)

◎セット内訳

- 第一箱 第一～六巻(明治四四～大正五年)十別冊 本体価格九〇、〇〇〇円
- 第二箱 第七～一二巻(大正六～十二年) 本体価格九〇、〇〇〇円
- 第三箱 第十三～一九巻(大正三～昭和四年) 本体価格一〇五、〇〇〇円
- 第四箱 第二〇～二六巻(昭和五～十二年) 本体価格一〇五、〇〇〇円
- 第五箱 第二七～三三巻(昭和二三～三〇年) 本体価格一〇五、〇〇〇円

別冊「解説(竹村民郎)・総目次・索引」
〈別冊のみ分売可〉四、〇〇〇円
本体価格四九五、〇〇〇円(税別)



不二出版(株)

〒113 東京都文京区向丘1-2-12
電話 03-3812-4433
FAX 03-3812-4464
振替口座 0016002794084

一九九五・〇

●本カタログ中の表示価格は、
全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。
●お近くの書店にご注文ください。